

“望郷のタンゴ”

峰 万里恵 (うた) 齋藤 徹 (コントラバス) 高場 将美 (ギター)

“Tangos de nostalgia”

Marie Mine (voz) – Tetsu Saitoh (contrabajo) – Masami Takaba (guitarra)

第 I 部

1. スール (南) *Sur*

詞：オメーロ・マンシ 曲：アニーバル・トロイロ

ブエノスアイレス市の南のはずれに近いポンページャ区は、詩人マンシが学生時代をすごしたところでした。大草原と都会のはざま——牧草地もあれば、都会のゴミの大きな廃棄場があり、大雨が降ると南の区境の川が氾濫しました。あちこちに沼ができ、夜になるとやかましい蛙の合唱が聞こえました。

1948年に、すでに消えてゆこうとしていた風景をうたったこの曲は、時がたつほど評価が高まり、近年では、スール (南) ということばは、タンゴの原風景のシンボル、キーワードとして使われるようになりました。

☆

古いあの街角と、いちめんの空。ポンページャ区、あの土手に近づけば、恋人のきみの長い髪が思い出のなかに。そしてきみの名前は、さよならのことばの上に浮かんでいる。あの鍛冶屋があった街角、泥と草原、きみの家ときみの歩道とあの掘割り。雑草とアルファルファ (牧草) の薫りが、いまふたたび、わたしの心を満たす……。

古いあの街角——なくなってしまった空。ポンページャ区、もっと先は洪水。

愛情でふるえていた、きみの20年、あのときわたしが盗んだキスの下で……。過ぎていったことどものノスタルジー、人生がいっしょに運んで行ってしまった砂、変わってしまった街に染みついたくるしみ、そして死んだ夢のがさ……。

南……土塀とその先は……南……酒場の明かりひとつ。もう決してきみには見えないだろう、ショーウィンドーにもたれかかって、きみを待っているわたしの姿が。もう決してわたしは星たちで照らすことはないだろう、ポンページャの夜また夜、仲むつまじいわたしたちの歩みを。

場末の路たちと月たち、そしてわたしの愛ときみの窓——すべては死んでしまった。わたしにはよくわかっている。

2. パリに錨 (いかり) をおろして *Anclao en París*

詞：エンリーケ・カディーカモ 曲：ギジェルモ・バルビエーリ

1920～30年代のヨーロッパのタンゴ・ブーム！ これを利用して、パリに行けば幸運がつかめるのではないかと、アルゼンチンの若いボヘミアンたちが片道切符で大西洋を渡っていきました。世の中はそううまくいきませんね。成功は来ず、帰りたくても、その旅費さえかせげません。

この歌詞は、そんな夢破れた青年たちをたくさん見た詩人カディーカモが、スペインのバルセロナのカフェのテーブルで、一気に書き上げ、そのときパリにいた親友の歌手カルロス・ガルデルに送りました。ガルデルもこの歌詞に感動し、伴奏ギタリストのバルビエーリに曲をつけてもらい、すぐ歌いました。作詞・作曲ともに、ブエノスアイレス人間の味が濃厚で、タンゴ歌曲の隠れた大傑作です。

☆

さすらいのボヘミアン人生に引きずられてきて、わたしはパリに錨 (いかり) をおろしてしまった。もう、身動きが取れない。不運に包まれ、困窮に囲ま

れ、わたしはこの遠い国からブエノスアイレスを思いおこす。パリの大通りに面した窓から、わたしはやわらかく降ってくる雪を見つめている。死んでゆくようなトーンの赤い灯たちは、妖しいまなざしの瞳のようだ。

だれかが話してくれた、ブエノスアイレスよ、おまえは花を咲かせているそうだね。中心に斜めの通りが一組できたとか——どれほど、おまえを見たいことだろう。ここで金もなく、信じる心もなくし、座礁しているわたし。

遠いブエノスアイレス、おまえはどんなにすてきなことだろう！ わたしは船出してからもう10年。このセンチメンタルな街モンマルトルで、わたしは感じる。思い出がわたしにナイフを刺し込むのを。

3. 花咲くオレンジの木 *Naranjo en flor*

詞：オメーロ・エスポーシト 曲：ビルヒーリオ・エスポーシト

1940年代の新感覚タンゴを代表する作者兄弟の作品。詩人の兄が20歳そこそこ、ピアニストの弟は16歳ぐらいでつくりました。天才芸術家には人生経験は不必要なのです。この兄弟の場合、まず歌詞ができて、そこに曲を付けるという創作過程でした。歌詞にすでに「音色」があります。

この曲のはじめに「やわらかい水よりも、やわらかい」という、わけのわからない表現がありますが、これは作者自身も意味がわかっていないのでご心配なく。意味を理解することは必要ではありません。なにか感じればいいのです。そして、その感じかたは、人によってちがっていいのです。

☆

「やわらかかった、やわらかい水よりも……。川よりもみずみずしかった。花ざかりのオレンジの木。そして、その夏の通り、失われた通りに、人生のひとかけらを残した。そして行ってしまった。

あのひとに、わたしの両手は何をしたのか？ わたしの胸に、これほどの痛みを残すほどの何をしてしまったのか？……。老いた木立の痛み、街角の歌、人生のひとかけらとともに……。花ざかりのオレンジの木。

人は最初に、悩むことを知らなくてはいけない。その後、愛する、その後、別れてゆく、そして最後は考えもなく歩きまわること……。花ざかりのオレンジの薫り。ひとつの愛の、むなしいいくつかの約束、それらは風のなかに逃げていった……。その後——その後、何の意味がある？ わたしの全人生は「きのう」なのに。永遠につづく、老いた青春、それがわたしを、なにもできない弱者にしてしまった、光をなくした小鳥のように……。

4. わが懐かしのブエノスアイレス *Mi Buenos Aires querido*

詞：アルフレード・レペーラ 曲：カルロス・ガルデル (補作：テリーグ・トゥッチ)

タンゴのうたいかたの発明者であるガルデルは、1934年を中心に1年あまりニューヨークに滞在して4本の主演映画を（世界のスペイン語観客がターゲット）つくりました。この曲は、その挿入曲のひとつです。ほとんどの曲は、ガルデルがまずうたってメロディをつくり、別の音楽家——多くの場合、ニューヨーク在住のアルゼンチン人オーケストラ編曲指揮者トゥッチ——が楽譜に書き写し、ときに一部分を足し（ガルデルのメロディはまったく変えませんが）、脚本家のレペーラが作詞して完成というわけです。

ガルデルやレペーラたちは、ニューヨークからラテンアメリカ各国を回ってプロモーション公演しながらブエノスアイレスに帰郷の途中、コロンビア国メデジンで離陸直後に小型機が墜落、一瞬の火災で亡くなってしまいました。1935年6月24日でした。……ガルデルは、この曲をブエノスアイレスでうたうことはできなかったのです。

☆

わたしの生まれた町のガス灯が、わたしの愛の約束を見張っていた。そのおだやかな光の下にわたし

は見た、太陽のように輝くわたしのむすめを。いま運命にみちびかれて、帰ってゆこうとするとき、わたしにはバンドネオンの嘆きの声が聞こえ、心臓が走り出そうとして抑えきれない。

わたしのブエノスアイレス、愛する土地。そこでいつの日か、わたしは命を終えるのだ。思い出たちがキャラバンを組んで、感動の甘美なルートをたどってゆく。おまえのことを思えば、こころの悩みも去ってゆく。

わたしの場末の町の小さな窓には、乙女の花が咲く。いちばん荒くれた路地に、情熱にあふれて突き進む祈りのような歌がひとつ。その歌声が悩みの涙をぬぐい去った。

わたしの愛するブエノスアイレス、ふたたびおまえに会うときは、悩みも忘却もなくなっているだろう。

5. タンゴ・エチュード 第3番 *Tango étude n°3*

曲：アストル・ピアソラ 編曲：齋藤 徹

齋藤徹のコントラバス・ソロをお聴きください。

アストル・ピアソラが、クラシックのヴァイオリン・ソロのためにつくったエチュードですが、リズムはもろんタンゴです。近年、各国のヴァイオリン奏者が興味をもって、コンサートや録音でとりあげています。ギターに編曲した人もいるとか……。でも、これをコントラバスで演奏するのは、おそらく世界で初めてです。

というより、そもそもコントラバスのソロでピアソラを弾く人は、世界で徹さんが唯一ですね。

6. イパカライの思い出 *Recuerdo de Ypacaraí*

詞：スレーマ・デ・ミルキン 曲：デメートリオ・オルティース

作曲者はパラグアイの首都アスンシオン出身のアルパ奏者で、パラナー河を下ってきてブエノスアイレスで活動（1975年同地没）。1953年にヒットしたこの曲の作詞者はアルゼンチンの女性で、近年はアルゼンチン女性詩人全集の編さんなどを行っています。イパカライ（先住民グアラニ人の言語での発音は「ウパカライ」に近い）は、アスンシオン近郊の湖です。グアラニ語は、建国当時から混血が奨励されたパラグアイでは、公用語のスペイン語より広く使われてきました。

☆

ある暖かい夜、わたしたちは知り合った、ウパカ

ライの青い湖のほとりで。あなたは悲しげにうたいながらやってきた、グアラニの古いメロディを。

あなたの歌の魔法の力で、わたしの中に愛がよみがえってきた。満月の美しい夜、あなたの白い手の熱が、わたしに愛をくれたのだ。

いまはどこにいる？ クニヤタイ（グアラニ人の若い女性）、あなたの歌はもうわたしのところにとどいてこない。すべてがあなたを思いださせる、わたしの甘い愛よ、ウパカライの青い湖のほとりで。

7. ボルベール（帰郷） *Volver*

詞：アルフレード・レペーラ 曲：カルロス・ガルデル

スペインのペドロ・アルモドバル監督が、この曲のタイトルをそのまま使った映画をつくりましたが、もともとはカルロス・ガルデルの主演映画（1934年）『想いのとどく日』の挿入歌のひとつとしてつくられました。

映画の中でもガルデルは歌手で、長く外国で活躍して、中年になって故郷ブエノスアイレスへ帰る船上で、この曲がうたわれます。スターが灰色の髪の老け役までやるのは、当時の映画の世界ではめずらしかったと思います。

☆

わたしには見える気がする、遠くでわたしの帰り道を教えてくれている光のまたたきが。そのおなじ光がかつては、深い痛みの時間を青白く照らしていたのだ。

人はそう望まないのに、最初の愛に帰ってゆくもの。あの古い通りで、いつか、こだまが言った、「あのひとの命はおまえのもの、あのひとの愛はお

まえのもの」 そのとき、あざけるように見下ろしていた星たちが、今日は冷ややかに、帰ってゆくわたしを見ている。

わたしはこわい、わたしの人生と対決しようとして帰ってくる過去と出会うのが。わたしはこわい、数々の思い出の鎖でわたしの夢を縛りつける夜が。でも逃げてゆく旅人は、遅かれ早かれ、歩みを止める。そしてすべてを破壊する忘却が、わたしの夢を殺してしまったとしても、わたしはとても小さな希望を隠し持っている。——それが、わたしの心の全財産。

帰ってゆく……「時」の雪で銀色に染まったこめかみ。感じる……人生は風のひと吹きだと、20年は「無」にすぎないと。生きてゆく……魂は甘い思い出にしがみついたまま。その思い出に、ふたたびわたしは泣く。

**2008年 3月23日（日） このアップリンク・ファクトリーにて
フランスのバンドネオン奏者 オリヴィエ・マヌーリ をゲストに**



Olivier Manoury

**峰 万里恵／齋藤 徹／高場 将美 のコンサート
をひらきます。**

初来日のオリヴィエは、フランスのリムーザン地方生まれでパリ育ち。子どものころはバグパイプで郷土音楽を演奏していました。楽器製作（ヴァイオリン、ヴィオラ、バロック楽器、民俗楽器）を経て、バンドネオンと出会い、一目ぼれ！ 演奏・調律・修理……1979年からバンドネオン演奏ひとすじで、タンゴ以外のジャンルでも活躍しています。モーリス・ベジャールのダンス・シアター『チェ・キホーテとバンドネオン』の作曲・演奏家としてアルゼンチンにもツアー。同地でバンドネオンについての講演もしました。

第II部

1. 南に帰る *Vuelvo al sur*

詞：フェルナンド・ソラーナス 曲：アストル・ピアソラ

軍事政権を逃れてパリに亡命していたアルゼンチンのフェルナンド・ソラーナス監督がつくった映画『スール その先は……愛』（1988年）の挿入歌のひとつです。

映画の中では、峰万里恵さんをタンゴの歌の魔法の世界に誘いこんだ張本人ロベルト・ゴジェネーチェが、古いスール（南）の人間の亡霊になって、うたっていました（ピアソラ5重奏団をバックに）。きょうの出演者3人にとって、それぞれに、なかなか複雑な思い入れがからんでいる曲です。リハーサルはしましたが、いつも違う演奏でした。本番はどうなるのか？ 3人が背負っている亡霊たちがいろいろ見えるでしょう。ケンカをしないでくれるといいですね（笑）。

☆

わたしは南に帰ってゆく、人がいつも愛に帰ってゆくように。わたしは、おまえに帰ってゆく、わたしの望みと不安をもって。

わたしは南にたどり着く、わたしの心の行く先。わたしは南の人間、バンドネオンのしらべのように。

わたしは南を夢見る、どこまでも大きな月、裏返しの空。わたしは南を探し求める、開かれた「時」とその「その後」。

わたしは南を愛する、その善き人々、その品位。わたしは南を感じる、ふたりだけのときの、あなたのからだのように。

2. 瓦屋根の古い大きな家 *Caserón de tejas*

詞・曲：カトゥロ・カスティージョ 曲：セバ스티アーン・ピアーナ

ベルグラノー区は、ブエノスアイレスの「南」の対極にあり、20世紀初頭から今日まで閑静な高級住宅地。その以前は、果樹や野菜の畑にかこまれた大きな田舎屋敷が点々と建っている感じでした。19世紀なかばまでは、ただの草原だったようです。このワルツ（1942年発表）の舞台は、まだ崩れずに建っていた昔の屋敷。

最初の4小節を作詞作曲したカスティージョは「南」の人間で、18歳のころ「たそがれのオルガニート」を作曲、30代になってからは作詞家として有名になりました。作曲したピアノは、彼の先生もしたピアニストですが、演奏活動よりも、タンゴやミロンガの作曲家・音楽教授・ブエノスアイレス民俗音楽研究家として知られていました。

☆

ベルグラノー区！ 瓦屋根の大きな家！ お姉さん、覚えていますか？ 歩道にすわって過ごしたあ

たたかい夜々のことを？ 近くを通る汽車が、めずらしい昔物語を、しとやかに立つバラの木の下に置いていってくれました。

甘い昼寝どきに、おじいさんがしてくれたおとぎ話にあったように、わたしはなにかを探し求める。あのとき暗い居間のピアノは、純粋な愛情の血を、ワルツにして流していた。

よみがえってきた！ よみがえってきた！ 眠りこんだピアノの声のなかに、あなたの手のこまやかな魔法の力で、おじいさんの燕尾服のすそが帰って来るだろう。呼んで！ 呼んで！ 古いおとぎ話を生きましよう。あのベルグラノーの古い大きな家で、閉ざされた神秘をのりこえて、ママがわたしたちを呼んでいる。

3. 遠いわたしのふるさと *Lejana tierra mía*

詞：アルフレード・レペーラ 曲：カルロス・ガルデル（補作：テリーグ・トゥッチ）

これもガルデル主演映画の挿入歌。大西洋航路の船上で、スペインからの移民たちの気持ちをうたってあげるという場面設定でしたので、サルスエラ（スペインの歌劇）風の音楽になっています。ガルデル・プロダクションが、スペイン語の国際市場に出す映画でしたから、より親しんでもらうために、タンゴ以外の音楽も、いつも少しまぜていました。

☆

遠いわたしのふるさと、おまえの空の下で、わたしはいつの日か死んでいきたい、おまえのなぐさめを受けながら。帰っていったおまえを見つめるとき、

わたしは笑うことができるだろうか？ 泣くことができるだろうか？

銀色の月の光の下、熱い心の巡礼者のセレナータだけが、わたしの村の静けさをやぶる。そよ風に運ばれてゆく愛の誓いや悩み。

遠いわたしのふるさと、どんなにわたしは、おまえの名前を呼んでいることか。眠れない千の夜ごと、不安に満ちた瞳で。わたしの星よ、言っておくれ、わたしの希望はむなしなものではないと。おまえはよくわかっているはず、もうすぐわたしが、私の古い愛のもとに帰ってゆくことを。

4. 人生にありがとう *Gracias a la vida*

詞・曲：ピオレータ・パーラ

チリの若者たちの「新しい歌」運動の、母のような存在だったピオレータ・パーラは、愛を失って自殺を決意し、みずから「最後の作品集」と名づけたアルバムを録音しました（1967年、49歳）。その中の1曲がこれですが、感情におぼれることなく、むしろ淡々と、生きてきて良かったことを語っています。この強い女性にとって、自殺は一步前進することだったのでしょうか？

☆

生きてきたおかげ——人生はこんなにたくさんのものをくれた。

わたしにふたつの明星をくれた。それを開くとき、わたしは完全に見分けられる、白から黒を、高い空に星の埋め込まれたその奥底を、群衆のなかにわたしの愛するひとを。

わたしに聞く耳をくれた。広がりの隅々まで、夜も昼も音を聞き取って記憶に刻み付けてきた。こおろぎとカナリアを、ハンマーを。タービンを、犬の吠え声を、夕立を、わたしの愛するひとの、あんな

にやさしい声を。

わたしに音と文字をくれた。それといっしょにくれたことばで、わたしは考え、声に出す。——母、友、きょうだい、そして光、わたしの愛するひとの魂の道すじを照らしている。

わたしに疲れた足の歩みをくれた。その足でわたしは野と沼を歩いた。海岸と荒野を、山と平原を、そしてあなたの家を、あなたの通りを、あなたの中庭を。

わたしに心臓をくれた。わたしが人間の頭脳の果実に目を向けるとき、その鼓動は速まる。わたしが善が悪から遠ざかっているのに目を向けるとき、あなたの澄んだ目の底に目を向けるとき。

わたしは笑うことをもらった、泣くことをもらった。そうやってわたしは心の痛みから幸せをより分ける。そのふたつがわたしの歌声を形づくる材料。そしてあなたたちの歌声、それはおなじ歌声。そしてみんなの歌声、それはわたし自身の歌声。

5. ブエノスアイレスの秋 *Otoño porteño*

曲：アストル・ピアソラ 編曲：齋藤 徹

ふたたび齋藤徹のコントラバス・ソロをお聴きください。

曲は、後に「ブエノスアイレスの四季」と呼ばれることになる連作のひとつです。作曲者アストル・ピアソラは、はじめは組曲のようにする意図はまったくなく、「ブエノスアイレスの夏」を劇音楽として作曲。その数年後に、秋・冬・春とつくりました。「秋」は4曲の中で、いちばん感傷的あるいはロマンティックといえます。既成観念をやぶるので有名なピアソラですが、この曲はどこかフランス音楽っぽい甘美な色調もあり、「もの想う秋」とかいうイメージそのままの音楽です。

6. つばめたち *Golondrinas*

詞：アルフレード・レペーラ 曲：カルロス・ガルデル（補作：アルベルト・カステジャーノス）

ガルデル主演映画の挿入歌。補作者（もしかしたら全曲をガルデルになり代わってつくったかもしれません）カステジャーノスは、彼のリハーサル・ピアニストで、映画の音楽監督でもありました。この映画の初めのほうではガルデルは大学生の年代で（失礼ながら、とても、そうは見えませんが）、曲も青春のロマンティズムいっぱいなのです。

☆

ただひと夏のつばめ、いつも、遠いさまざまの空にあこがれて、さすらい、旅する土地っ子の魂。おまえを引き止めようとするのはむりなこと。翼に熱病をもったつばめ、感情に酔いしれた巡礼者。いつもほかのいろんな道を夢見ている、おまえの心の狂

った羅針盤。

海を渡ってゆくおまえの道すじに、歌の青い航跡が花ひらく。新しい風景の魔法に呼び寄せられて、遠い土地にハーモニーをまきちらし、おまえはよその月たちを追ってゆく。おまえのただひとつの目的地は、ただ飛ぶこと。

つばめはある日、飛ぶことをやめるだろう。遠いものに見とれていたその目から雲が晴れるだろう。そしてあなたの両腕のなかに巣をつくる。

遠くにあこがれていた心は、あなたの古い愛の甘い香りでいやされる。わたしの町の土地っ子娘、翼をたたんで、わたしも帰ってゆこう。

7. ラ・ペレグリナシオン（聖家族のさすらい） *La Peregrinación*

詞：フェリクス・ルーナ 曲：アリエール・ラミーレス

アルゼンチンの草原《パンパ》の伝統的な歌入りフォークダンス《ウエジャ》の形式による新しい民謡です。ウエジャはふつうのスペイン語で「痕跡」のことですが、アルゼンチンでは特に、牛車のわだちの跡を意味し、つまり大草原の「道なき道」を指しています。《クラベル・デル・アイレ》は、パンパ特有の、小さなカーネーションのような花で、根がなく、風に飛ばされて止まったところ——小屋の軒先や牛車の上、ときには帽子や衣服でも——で咲きます。

☆

わだちの跡をたどって、ホセ（ヨセフ）とマリ

ア。凍りついた大草原、アザミとイラクサのあいだを。野の花クラベル・デル・アイレ、あなたはどこで生まれるのか？

わだちの跡をたどって、いくつもの太陽、いくつもの月。小さなアーモンドのような目、オリーブの色の肌。草ぶきの小屋の中、野のロバとこげ茶色の牛。わたしを守ってくれるのは、このふたりの友だちの息と、澄んだ月。

わだちの跡をたどって、ホセとマリア。隠れた神様ひとり連れて……だれも知らなかった……。

お聴きいただき ありがとうございます。
またお会いできるのを 楽しみにしております。
みなさま よいお年を！

“望郷のタンゴ”

2007年12月8日

アップリンク・ファクトリー

出演：

峰 万里恵（うた）

齋藤 徹（コントラバス）

高場 将美（ギター）

企画：倉持 政晴（アップリンク）／峰 万里恵

うた選曲・構成：峰 万里恵

プログラム作成：高場 将美

☞ホームページ／ブログ☞

峰 万里恵 <http://mariemine.web.fc2.com>

齋藤 徹 <http://www.tetsu-saitoh.com> <http://blog.tetsu-saitoh.com>

アップリンク <http://www.uplink.co.jp>
